

# IT未来 いま

世界の政治と経済の先行きが不透明さを増すなかで迎えた2017年。閉塞を打ち破るイノベーションがいっそう重要になる。IT(情報技術)が飛躍的に進化し、斬新なアイデアを実現しやすくなっているのは前向きな材料だ。人工知能(AI)やロボットをどう産業、雇用の創出に生かすか。日本からも野心的な試みが出てきた。

## 広げよう人の能力

東京大学の舘澤名教授が開発を引っ張るヒト型ロボット「テレサ」。白くて丸い顔に2つの黒い目が印象的だが、動かし方もユニークだ。体験してみる。

まずヘルメットのようなディスプレイ装置を頭にかぶる。続いて手の位置や指の動きを検知する手袋。モニターで振動する小さな機器も指先に巻きつける。これで準備OKだ。

私が右を向くと、まねるようにテレサも右を向く。腕や5本の指も同様に動く。私のディスプレイにはテレサが見ているものがそのまま映る。テレサの指先に物が触れると、感触が私の指先にも伝わってくる。

離れた場所にあるロボットを自分の分身(アバター)として操る「テレグジスタンス」。1980年に舘氏が提唱した。世界のあちこちにアバターロボットを配置し、日本にいながらヒマラヤ登山やパリでの買い物を実験する。そんな将来図を描く。

### ロボットやAI味方に

本命は遠隔就労だ。アバターロボット対応の工場や建設現場なら、介護や育児に励みつつ自宅から体を動かす仕事に就ける。体力や視力が衰えた高齢者も、たくましいアバターロボットを通じて経験や知識を生かして働ける。

労働力の「輸入」も夢ではない。働き方改革を超えた働き方革命だ。「少子高齢化が進む日本の切り札になる」と舘氏。人手不足に悩む建設、物流などの企業が関心を寄せ、情報交換や共同研究をする

コンソーシアムには40社以上が加わる。仮想現実(VR)技術の高まりは開発の追い風だ。17年度には指が精密に動き移動もできる新型テレサが誕生する。さらに、テレグジスタンス開発の輪が世界に広がる可能性が出てきた。民間による月面探査といった難題に、賞金レースの手法で挑む米国のXプライズ財団がレースのテーマに選んだからだ。アバターロボットで仕事や娯楽のあり方を刷新しようとする研究者が英知を競えば、実用化に近づく。

甲高いモーター音を響かせ、プロペラ4つのドローン(小型無人機)が浮かび上がった。突き放すように何度も機体を手で押しやるが、姿勢を立て直しもどこの場所に戻ってくる。安定飛行の秘密は、周囲の景色を学習し、自ら飛び方を判断するAIにある。

「どこでも誰でもAIが使える、効率がよく便利で快適。そういう世の中にした」と。東工大准教授でもある長谷川修最高経営責任者(CEO)は話す。17年は米アップルのスマートフォンの発売から10

### 次代の主役

ライフズテックが開催するプログラミングの教室で、アプリやゲームの開発方法を学ぶ中高生(東京都港区)



## 創造力で社会より良く

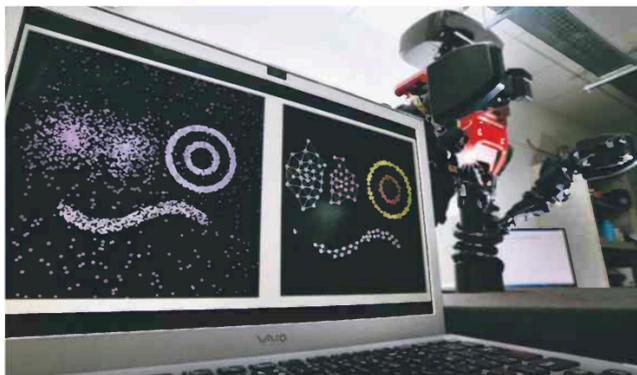
声、センサー、テキストなどのデータを複合的に処理できる。企業が抱えるさまざまな課題を解けるのではないかと注目的だ。例えばセブン銀行は、全国に2万2千台あるATMに入れておくべき紙幣の予測に役立てた。重機メーカーや土木・建設会社など、約20社との間で導人に向けた検討が進む。

市販のパソコンでも動く容量の小ささが特徴だ。ドローンのほかロボット、家電、自動車にも搭載できる。あらゆるものがネットにつ

ながる「IoT」の潮流で商機は膨らむ。16年、産業革新機構と西武しんきんキヤピタルから計3億円の投資を受けた。「どこでも誰でもAIが使える、効率がよく便利で快適。そういう世の中にした」と。東工大准教授でもある長谷川修最高経営責任者(CEO)は話す。17年は米アップルのスマートフォンの発売から10

### 働き方革命

視覚、聴覚、触覚を共有し遠隔操作ができる「テレサ」。遠隔地から仕事をする未来も見据える(東京都江東区)



### 誰もが駆使

SOINNのAI。ロボットにも搭載できる(横浜市緑区)

年(編集委員 村山恵一)